

農民文学は農民像を追究し農村風俗に取材する作品をいう、と仮定する。それは描写のおもな対象となる各時代の農民や農村のあり方に制約される。だから太平洋戦争後の農民文学は、小作争議や家父長制に取材する意義を減退させた農地改革（昭二一）や民法改正（昭二二）により困難を与えられた。この二つの社会変革が農民文学史の画期を形成し、不振の農民文学はどうあるべきかと問う農民文学論が積み重なる一方で、画期以前の農民文学の変遷を整序し記録する、あるいは任意の作品の農民文学史における役割を考察するという、農民文学研究の必要が増大する。

そして農民文学研究に表れる特徴が、いくつかある。シャルル・ルイ・フィリップ十三回忌記念講演会（大一一）以前に農民を描いた小説を、講演会以後の作品と同じ価値基準で評価することが一つ。次に農民自治派やプロレタリア文学陣営の関係者、これに同情的な立場からする考察が少なくないことも特徴の一つである。島木健作「生活の探求」（昭一二、河出書房）に対する注目度が低落していること、戦時下の農民文学に対する評価が低いことも特徴だ。また農民文学作品の紹介に終始する文章を散見すること、検討の対象を文学史の一時期に限る研究が多いことも気になる。じつは一次資料の復刻などのために農民文学研究の環境は改善され続けている。多様な研究が現れてよいはずなのだが、従事する研究者は減少している。これも特徴の一つだろう。

本論はこれらの傾向の乗り越えを目ざす。フィリップ記念講演会以前の動向を郷土芸術・田園文学などの術語を手がかりに再構成し、これを農民文学の前史と位置づけることで以後の農民文学史との差異を明示するようにした。なお長塚節「土」（『東京朝日新聞』明四三・六・一三―一・一七）論に一章を充てることは避けた。また農民自治派とプロレタリア文学陣営、双方の議論を勘案した。分析対象として、いずれかに偏らないようにしている。戦時下の農民文学を検討する一章を設け、その国策性について考察した。当然だが梗概や紹介に終始した章は一つもない。ただし作品の概説や作家紹介を適宜挿入している。なお本論は大正期から昭和三〇年代までの時期を研究対象とするが、必要に応じて明治期や昭和四〇年代以後の議論を参照した。以上の方針のもとで、農民文学史を多角的・通史的に再構成しようというのが本論の企図したところである。以下各章について略述することにしよう。

農民文学運動は、前述フィリップ記念講演会を契機に始動した。この会は「民衆詩人、農人文芸家である」（吉江喬松「仏蘭西文芸印象記（七）」大地の声 シャルル・ルイ・フィリップ）『新潮』大一一・一二）フィリップを記念して、小牧近江や孤雁吉江喬松が主催したものだ。のちに農民文芸会が発会し、同会編『農民文芸十六講』（大一一五、春陽堂）の出版や機関誌『農民』の創刊（昭二・一〇）に繋がり、運動が本格化した。本論は講演会の開催以前を農民文学運動前史と捉えて、これに第一部を充てた。運動者たちが、農民文学の必要条件を備えないという理由で排除した郷土芸術、田園を題材とする文章、地方色を重要視する文章などを考察対象に据え、第一章で「唯一の郷土芸術家といはれてゐる」（加能作次郎「救ひを求むる心」『新潮』大八・一二）加藤武雄の作家的出発と、その第一作品集『郷愁』（大八、新潮社）について考察し、さらに第二章で同時代の郷土芸術論や関係諸分野の言説を検討した。なお第一部が対象とする期間は、明治三十九年ごろから大正一五年ごろまでである。

農民文芸会の活動とともに、プロレタリア文学陣営の動向も農民文学史に大きな影響を与えた。いわゆるハリコフ会議（一九三〇）で採択された、「日本に於けるプロレタリア文学運動についての同志松山の報告に対する決議」もそれである。第三項に「農民文学に対するプロレタリアートの影響を深化する」必要が記載（『ナツプ』昭六・二）される。これにより第三次『農民』派とナツプ（全日本無産者芸術連盟）派とのあいだに農民文学論争が起こり、農民文学とは何か、という観点で議論が応酬された。結果的に相互の農民文学像の特徴が鮮明に表れることになる。本論は『農民』創刊からハリコフ会議、そして日本プロレタリア作家同盟の衰亡までに第二部を充てた。まず第三章で『農民』派の農民

文学論を背景に、ナップ派との角逐も視野におさめつつ、農民文学者である和田傳の作家・作品研究を展開した。次に第四章で黒島伝治の作品研究を試みた。和田の初期作品が同時代の言説の影響を受けていた様子、黒島の作品における青野季吉「自然生長と目的意識」(『文芸戦線』大・五・九)の影響如何、などを検討している。なお第二部が取り扱う期間は、大正十一年ごろから昭和九年ごろまでである。

昭和九年の作家同盟の解散により、農民文学に対して「プロレタリアートの影響を深化する」試みは沈静した。一方で農民文学懇話会の発会(昭一四)により国策の影響が徐々に強まる。かつてなく農民文学が重要視された同時代の考察に、本論は第三部を充てる。この時代において農民文学を牽引した作家が、前述の和田傳である。その活動は、創作はもとより評論におよび、彼の農民文学像が大方の賛意を得て、ついに懇話会の実現にまで到る。その周辺事情の確認も含めて、同時期の和田の作家・作品研究を第五章で試みた。ここで和田の活動を同時代の農民文学の主流とすれば、傍流にはプロレタリア文学陣営の後継である山田多賀市『耕土』(昭一五、大観堂)が位置する。「最後の労働者作家ともいふべき」(南雲道雄「解説」『土とふるさとの文学全集』4 土に生きる)昭五一、家の光協会)山田の「耕土」は、その作家的出自を反映して地主小作の対峙を描きながら、農民と商人の相克も描くことで『農民』派の見地を取り込む。また「耕土」の最大の特徴は、それが面白いということだ。第六章は、どのような農民文学が面白いのか、を視野に入れた。なお第三部は昭和九年ごろから昭和十五年ごろまでを取り扱う。

太平洋戦争敗戦後、農地改革や民法改正が農民と農村のあり方を変え、従来の農民文学が存在困難な状況に追い込まれたことは前述したとおりだ。いま農民文学はどうあるべきか、という問いに対する答えは容易に出ず、創作の低調を嘆く言葉が繰り返される。それが長きに渡るなか、伊藤永之介が「電源工事場」(『新潮』昭二八・一一)を発表した。この作品は、「展望のひろい農業小説まで発展できない」(『日本を知らない日本人』『朝日新聞』昭二八・七・五・朝)農民文学という武田の論難に応えるように、復興事業であるはずの電源開発において開拓農民たちが搾取される様子を描き、戦後日本社会の歪みを視野に入れる展望の広さを示した。このように同時代状況への批判的態度を強める伊藤に對して、和田傳がむしろ同時代の思潮に寄り添う姿勢を見せている。ただし和田の文業は迎合というたぐいのものではなく、たとえば家族制度を否認して均分相続を定めた民法改正(昭二二)の不備にもの申す、という具合のものである。新しい農民像を構築しようとした努力に照明が当てられるべきであり、本論はその現れを『風の道』(昭三六、新潮社)に見ている。伊藤「電源工事場」研究に第七章を、和田「風の道」ほかの研究に第八章を充てた。なお第四部第七章は昭和二十一年から二十八年までを、第八章は昭和三十一年から三十六年までを考察の対象としている。

そして本論で考察した大正・昭和前期の農民や農村を描いた小説の背景には、(農民の)「農民による」(農民のための)なる三要件の、各時代の農民文学論における組み替えという事情が存在する。ただしこれら要件の影響力は戦後十数年で低下する。昭和三六年に公布(同三九年施行)された農業基本法は「農工間の労働生産性や所得などの格差是正を謳い文句に、農業・農村に滞留する低廉な土地や水、労働力などを工業・都市に吸いあげる水先案内をして」(山海野玄「戦後農民文学史 おんなたちの系譜」『農民文学』二〇〇三・七)、農業人口を激減させた。ここに至り「国民の半数に近い農民と農村を全く反映していない」(伊藤永之介「農民文学の在り方」『朝日新聞』昭二九・一一・二〇・朝)日本文学の誤りを正すべく現れた農民文学の存在意義が危うくなる。また昭和三六年は日本農民文学会(一九五四年発会)で「農民文学賞の受賞をめぐるトラブルがあり、和田傳氏ら数人が退会」し「職業作家のほとんどが会をはなれ」(堀江泰紹「文学の力、精神的自由について」『農民文学』一九九五・七)た年でもある。以後の農民文学運動の中心はおもに非職業作家たちが担うが、これが一方で文学としての質の低下を呼ぶ。農民文学は昭和三六年以後急速に衰えつつあるのだ。しかしそれは農民文学自体が無用の長物と化したことを意味しない。いま「農民文学」は、かつて交通していた望郷、地方、労働運動、植民地、開発・開拓、家族制度などの関係諸語を、現代においてとりまとめる象徴的な名前として存在しているのである。